
Blue Rose

早乙女 葉瑠夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Rose

【Nコード】

N0162H

【作者名】

早乙女 葉瑠夏

【あらすじ】

恋人の朔哉から裏切られた愛は6階建てのビルから飛び降り、意識不明の重体ながらも命を取り留めていた。朔哉は愛が見知らぬ青い瞳をした男と一緒に落ちていく姿を目撃した。しかし監視カメラや目撃情報には“男”は存在しなかった。存在しない青い瞳の男の正体。一体何者なのか

プロローグ

青い薔薇の花言葉

“不可能”

“あり得ない”

本来、存在しなかった青い薔薇。

けれど開発が進み、青い薔薇を誕生させることにより新たな花言葉が誕生した。

“奇跡”

“神の祝福”

暗闇に浮かぶ満月の夜

青い薔薇が咲いた

私は出会はずのないあなたに出会った

奇跡みたいに

生と死

暗闇に浮かぶ蒼い月が世界を照らす。

ビルの屋上から見る月に手を伸ばすと、不思議と届きそつな気がする。

私は…

何のために生きているんだろう。

誰のために生きているんだろう。

私は

どうして生きているんだろう。

街に煌めくネオンの数だけ、たくさんの人々。

もしも私が死んだとして

どれだけの人間が涙を流して泣くのだろう。

全く子供に無関心で、自分のことばかり考える離婚間近の両親。

いつも一緒にいて、何でも話して笑って泣いて、信じていたのに、
恋人を寝とるような親友。

優しくて、信頼しあえて、愛を感じていたはずなのに結局、絆一つ
なかった恋人。

人生いいことなんて何も無い。

この先、光をさす未来なんて、私にはない。

どす黒く重たくて苦しい気持ち。

ビルから身を投げたら、きっと全て消える。

月に手を伸ばそうとしたが、思わずその手を止めていた。

足音も聴こえないのに、人の気配を感じる。振り返ると黒いスーツを身にまとい、しつかりネクタイをしめ、ハーフにもみえるキレイな顔立ちをした20代前半くらいの男性がゆっくりと近づいてきた。

「哀しそうな顔してる」

オフィスが入っているビルだけに、スーツ姿の社会人が居るのは珍しくなんてない。

けれどその彼は私をみるなり、心の中を見透かしたようにサラッといった。

「そう　ですか？」

満月を見上げたままの彼の横顔に答えた。

「月に手を伸ばしても、届くことはない。キミはそんな顔より笑ってるほうがずっといい」

まるで私を昔から知ってるような言い方。

「あの　私のこと知ってるんですか？」

彼はその問いに返事をするわけでもなく、頷くわけでもなく、ただ優しい笑みを浮かべていた。

初めて会った見ず知らずの男性。

何も知らない人にだからこそ、聞いてもらいたくなつたのかもしれない。

私は胸にある嫌な思いを吐き出すみたいに、話始めた。

「時々　わからなくなるんです。自分自身が　」

私は小さい頃から何でもガマンする癖がついていた。

仕事を優先する両親。

母は父に対する対抗心が強く、物心がついた頃には既にいつもピリピリしていた。

父は海外勤務が多く、留守がちだったせいもあるのか、母のストレ

ス発散の場所となるのが私だった。

仕事で面白くないことがあれば当たり前散らす。

誰の前でも泣けない私は、全部投げ出さなくなったとき、小さい頃はまだ廃墟ビルだったこのビルの屋上で一人、よく泣いていた。

次第に私はそんな母の機嫌を取るようになり、自分の思いを抑えガマンするようになっていった。

友達の前でも自分を抑えてしまう私は、全てを相手に合わせて適当に笑う。

“ 本当の自分を見せてくれない気がする ”

時々言われる言葉。

自分を隠して、殺していたせいで大事な本当の自分をなくしてしまっただのかもしれない。

それでもそんな私のことを

「好きだ」といつてくれた朔哉。

クラスでも少し浮いてる私を

「気にすることないよ」といつてくれた親友のエリカ。

心から笑える相手だったはずなのに　私は見てしまったんだ。

放課後、職員室に呼ばれていた私の帰りを待っていてくれていた朔哉の教室へと向かうと数人の女子が残っているだけだった。

「ねえ、朔哉知らない？」

「ああ、さっきエリカが来て一緒にどっか行ったよ」

「ありがとう」

セーラー服のスカートのポケットに手をいれ、携帯電話を取り出そうとしたが、ない。

カバンの中に入れたままだったことを思いだし、教室に置いてあるカバンを取りに向かった。

誰もいない廊下はシンと静まり返り、足音だけが響いていた。

教室にたどり着くと人影が見えた。

まだ教室に誰か残ってる。

ただそう思っただけで、何のためらいもなくドアを開けた瞬間、私は足が、手が、瞬きが止まっていた。

見覚えのある男女がキスを交わし、彼の左手が彼女の制服の中をさま迷っている。

その彼が私の存在に気付くのに時間はかからなかった。

「愛」

慌てて彼女から離れ、私の名を呼ぶ彼は、紛れもなく私の恋人である朔哉だった。「何で　こんなときに笑うんだよ　オレ最低なことしたんだから怒れよ！何で怒らないんだよ　何でいつもガマンするんだよ」

今、すごく哀しくて苦しくて辛い感情をむき出しにするのが嫌なわけじゃない、ただ怖いんだ。

どう表現したらいいのかわからないんだ。

早くこの場所から消え去りたい。

一人になりたい

何も答えない私の腕を掴んでいた朔哉の手から力が抜けていった。

「ごめん ごめんね」

込み上げる感情がもうこれ以上抑えられない。

喉に広がる熱い想いが涙として溢れ出そうので、顔を伏せると頬に涙が伝った。

キラリと光る涙が床へと落ちる。

腕を振りほどき、私は走り出していた。

行く宛はいつも同じ。

廃墟ビルからオフィスビルへと変身を遂げたこのビルの屋上。

「親なんかいなくなつたて、友達や恋人がいればって思つてたのに、それも失つて　生きる意味ってなんですか…ね　」

そこで出会つた彼に私のことを話終えた頃には涙が止まらなかつた。

こんなにも感情をむき出しにし、素直に自分のことを話せたのが不思議だつた。隣にいる彼は、相槌を打つわけでも頷くわけでもなく、ただ聞いているだけだつたが、私が話を終えると大きな手で涙を拭つてくれた。

その手は、妙に冷たかつた。

「キミの名前は？」

「アイです。愛されないのに愛なんて名前、おかしいですよね…」

笑つて誤魔化したが、彼の視線が痛いほどに感じ、視線を合わせた。

彼の瞳は、青かつた。

外国人の瞳の青さとは違う、藍色のような深い青い色。

吸い込まれそうな目力。

いつの日か、この目を見たことがある。

どこだっただろう

大切なことを忘れている気がする。

「アイ、キミはどうしたい？」

「私は」

“死んでしまいたい”

と後続く言葉を呑み込み、心の中だけで呟いたはずなのに。

彼は手を差し伸べていった。

「一緒に逝こう　アイを一人にはさせないから」

止まっていたはずの涙が再び込み上げた。

どうしてだろう。

初めて逢った彼の言葉が懐かしくて、暖かく感じるのは。

ずっと孤独で寂しかった心が、埋まっていく

彼の冷たい手を握った。

その瞬間、忘れていた“何か”がフラッシュバックするように頭の中に写し出された。

断片的な記憶が、少しずつ繋がっていく…

ピアノの音が聴こえる。

白い砂浜に青い海

私が笑うと、あなたは優しく微笑み返す。

楽しかった記憶……

だけど最後に写し出されたのはあなたの泣き顔。

“一緒に死のうって約束したのに…”

その言葉がまるで針のように私の胸を突き刺す。

グレーの雲に闇にもみえる黒い海へと青い薔薇が沈んでく

「…あなたの名前は……」

「アラタ」

彼は名前を告げると小さく微笑み、キレイな青い目で私をジッとみつめた。

「今日はアイの誕生日」

「えっ？」

「12月7日はキミの誕生日だろ？」

「そうだ　　誕生日だ……」

いい思い出なんて何一つない誕生日。

この世に私が誕生した日なんてなくなればいいんだ。

「お祝いしよう、二人で」

「お祝い……？」

「そう。誕生日が終わる前に行こう」

冷たい手でアラタは私の手を握り、ビルを出た。
仕事はいいんだろうか？

見ず知らずの男性と成り行きのまま来てしまったけれど大丈夫なん

だろうか？

「アイ、あれ食べよう」

冬だというのに無邪気にアイスを食べたいと指差すアラタに、自然と笑みが溢れていた。

冷たい大きな手をしっかりと握りしめた。

ハンバーガーを食べて腹ごしらえをすると、プリクラに並ぶ数人を見てアラタはいった。

「あれ何？」

「あれってプリクラのこと？」

「プリクラ知らないの？」

「知らない」

「本当に？写真がシールになるんだよ」

「ふうん」

プリクラを知らないということに、冗談かと思ったが不思議そうにみるその目にウソは感じられなかった。

「じゃあ撮ろう」

アラタの手を引っ張り、空いてる機械に入った。

お金を入れると、機械の音が案内を始める。

二人はポーズを決めたり、ふざけた顔をしてみたりと笑い合いながら撮影は終わった。

外から完成したプリクラが出てくるとマジマジと見ていた。

海外にはプリクラはないんだろうか？

そもそも、私はアラタを何も知らない。

何の仕事をしているのかも。

生まれた場所も。

誕生日も。

どこに住んでいるのかも。
年齢も。

どうして私を知っているのかも

何も知らない。

「アイ？おいで…」

少しだけ有名で大きな公園。

端にはグラウンド。ピアノが置いてある。

繋いだ手を離し、ピアノを開け、座った。

私もまた、すぐ側にあるベンチに座るとアラタは目を閉じ、鍵盤を叩き始めた。

目を閉じたまま弾くアラタ。

優しく語りかけるような音色。

音一つはずさない。

どこか懐かしい曲

クラシックなんてほとんど聞かない私は、よっぽど有名な曲じゃない限り、タイトルなど知らない。

ただこの曲は知っている。

そう。

「blue rose」

思わず口にしていた。

どうして知っているんだろう。

この曲は有名なミュージシャンの曲でもなければ、有名なクラシックの曲でもない。

元々存在しない曲だ

アラタはピタリと手を止めた。

「当たり前」

満足そうに微笑みピアノを元通りに戻すと、ゆっくり立ち上がり再び口を開いた。

「イギリスと日本のハーフでイギリス出身。仕事は してない。誕生日は12月14日、23歳」

まるで頭の中を読み取ることができるみたいに、私の考えていることを当てた。

「23ってことは5つ上か 仕事 してないの？」

「ピアノ、弾いてた。オレにはなんの才能もない ピアノしかないから」

「でも やめちゃったの？ピアノ」

その質問にアラタは遠くを見つめ、首を左右に振った。

「認めてもらうために聴かせるんじゃない、誰か一人が聴いてくれればそれでいい」

「そっか　それもいいね」

誰かの為に弾ける曲がある。
聴いてもらう大切な人がいる。

アラタと一緒にいて、自分らしくいられるせいで勘違いしそうになる。

死んだりなんかしなくても、いいことだってあるのかもしれないなんて思ったりしたけど、やっぱり生きている限り、私は孤独だ。

アラタはポケットから何かを取り出し両手拳を握り、前に出した。

「どっちがいい？」

手の中に何が入っているのわからない。催促するように、より前へ拳を出す。

私は首を傾げながらも、左手の方を指差すとアラタは拳を開いた。

「キミが生まれて18回目の誕生日」

開いた掌には青い透明な石がついた指輪があった。

アラタの瞳の色を思い出させる色。

私の左手を取り、薬指にゆっくりとはめた。

「誕生日おめでとう」

心臓がキュンと締め付けられる。

サイズはぴったりだ。

18年生きてきた中で、始めて心から“幸せ”だと感じた瞬間だった。

涙で世界が滲む。

瞬きをすると涙が落ちた。

「ありがとう 最高の誕生日」

青い瞳に青い指輪。

頭の中にある記憶の糸がピンと張った。

いつだったか同じようにアラタが私にこうして笑いかけたことがあった気がする。

脳裏に甦る映像。

指輪…

左手の薬指には青い石のついた指輪。

アラタは嬉しそうに微笑みながら、自分の左手をみせると、そこには同じ指輪がはめられている。

“ 約束だよ ”

声が耳に響く。

そうだ。

私はアラタと約束をした。「ずっと一緒にいよう　もう離ればなれはイヤだ。アイ、ずっと側にいて」

私を壊れそうなガラスにでも触れるみたいに、そっと優しく抱き締めた。

「うん。ずっと側にいる 約束」

前にも一度、こんなふうに約束を交わした。

顔をうずめ、囁いた。

私にはもう、失うものなんて何も無い。

親も親友も恋人も。

私にはもう、いない。

アラタさえいてくれたら、もう他に何もいら無い。

「そろそろ、いこうか」

「どっどこ？」

耳元でしか聞こえない声。

「永遠に一緒に居てくれるんだよね？」

次第に痛いほどに力強く抱き締めた。

冷たい体に締め付けられ、息が乱れ始めると再び瞳の奥に刺激が走り、映像が写し出された。

哀しい目をしたアラタがピアノの音と共に闇に消えていく。

青い薔薇を追うように。

孤独
絶望
哀愁
悲嘆

アラタの瞳から伝わる想いは、まるで自分をみているようで重なった。

「アラタ 私は逃げたりしないよ？ずっと一緒にいる。側にいる。だから…そんな哀しい目をしないで？」

「アイ……」

蒼白い頬に伝う涙。

アラタは力を抜き、一度体を離し、私の顔をいとおしい眼差しで見つめながら両手で何度も何度も頬を撫でると、もう一度抱き締めた。

「ごめん…キミは何も悪くないのに ごめん…… だけでもう居なくならないでほしいんだ」

「大丈夫だよ。居なくなったりしないから」

一人になる恐怖が伝わる。

私と同じだ。

暗い闇から抜け出したい。
もう一人はイヤだ。

ずっと一緒に寄り添っていたい。

「逝こう」

私たちは手を繋ぎ、何一つ言葉を交わすことなくビルへと戻っていた。

6階建てのオフィスビル。

既に23時を回っていることもあり、スーツ姿の社会人の姿はほとんど見られない。

エレベーターのボタンを押すとポーンという音が鳴り、5階に付いていたランプが徐々におりてきた。

1階のランプが付き、ピンポンと音が鳴ると同時に私のカバンの中にある携帯電話が鳴り響いた。

一瞬、心臓がドクンと鳴いた。

きつと朔哉だ。

もう話すことなんてない。

鳴り続ける携帯をよそに、私はエレベーターに向かって足を進めた。

しかし、止めるようにアラタは腕を掴んでいた。

「電話鳴ってる」

「気にしなくていいよ」

「タバコ買ってくるから、少しだけ待ってて」

気を遣ったのか、アラタは来た道を戻り、コンビニのある方へと歩いていった。

カバンの中から携帯電話を取りだし、着信履歴を確認する。

思った通り、朔哉だ。

ずっと気付かなかったのか、朔哉からの着信履歴は10件と表示されていた。

今さら話すことなんて何もないのに、何を思っかけてくるんだろう。

同情なら必要ない。

私が欲しいのは 愛情。

電源を切った。

カバンにしまおうとするとヒラヒラと一枚の紙が落ちた。

さっきアラタと二人で撮ったプリクラだ。

本当に楽しそうに笑ってる。

携帯電話の裏に貼られてる朔哉と撮ったプリクラと見比べた。

朔哉といった時も、私はちゃんと笑っていた。

幸せそうにカメラに向かって笑っている。「それ、誰？」

アラタの声で我に返った。

考え事によっぽど集中していたせいか、戻ってきたことに全く気付かなかった。

「元カレ」

「元カレ？」

「そう、前付き合ってた人だよ。けどもう、終わったの」

私は携帯電話の裏に貼られてる朔哉とのプリクラを剥がし、アラタと撮ったプリクラを貼り直し、アラタの表情を伺うようにしてチラッとみたものの、思いの外、気にはいなかった。

手を繋ぎ、今度こそエレベーターへと乗り込んだ。

屋上へ着き重たいドアを引くと、冷たい外の空気が全身を包んだ。

満天の星空に月明かりが眩しいほどの満月。

アラタはタバコを加え、ライターで火をつけると白い息とは別に、煙が吐き出された。

暗闇の中、月明かりだけが私たちを照らしてる。

そんな蒼白い光の中で、アラタの左手の薬指に光るものを、私は見逃したりはしなかった。

「じれ
」

左手を取り、薬指にある指輪を見てはアラタの顔を覗き込んだ。
小さな明かりだけでもよく分かる、アラタの青い瞳。

「ペアリング。ずっと欲しいっていつてたから」

「うん　　これ何だかアラタの瞳の色みたいですよごくキレイだよ
ね」

優しく笑いかけてくれた。

時計の針は11時46分を指している。

もうすぐ誕生日も終わる。

アラタとの時間はまるで幻想のようで、夢のような時間はあっという間に過ぎていく。

朝になればまた、孤独の日常が始まる。

ずっと一緒に居ようって約束したけれど“永遠”なんて

死なない限り、存在しない。

私にはもう、孤独と共に生きていく自信がない。

アラタを見送ったら、一人で

「アイ」

満月を見つめながら物思いに更ける私を呼ぶ声。

振り返るとアラタの手の中には小さなショートケーキにロウソクが8本刺してあり、オレンジ色の炎がゆらゆらと輝いていた。

「ロウソク、消して」

「うん」

笑顔で頷き、私は迷うことなく火を吹き消した。
一気に消えたロウソクからは白い煙が天に昇った。

ケーキを一口、頬張った。

「今日は生きている中で一番幸せで、ステキな誕生日だった。ありがとう」

哀しいわけじゃない。
辛いわけじゃない。

怖いわけじゃないのに、涙が込み上げると悴む手が震えた。

「アイ もう置きざりはイヤだ…」

闇で支配されたような、暗く、哀しみが滲み出ている目でアラタは私を見つめた。

「どうして…」

「一緒に逝こう」

お互いの両手を繋ぐと、アラタは右手で名残惜しそうに私の左手の薬指にはめられた青い指輪をなぞった。

そして何かの誓いのように優しく指輪にキスをした。

視線が重なり合う二人はキスを交わした。

「やっと、ずっと一緒に居られる」

私はアラタのその言葉に何も言わず頷いた。

死ぬのが怖いなんて、全く感じなかった。

私には心残りなんて何もないから。

悲しんでくれる人もきつといないから。

みんなすぐに忘れてく

そしていつか、そんなヤツもいたかもしれないなんて、時に思い出されたりするのかな。私の右手。

アラタの左手。

繋いだ手を離さぬようにしっかりと握る。

時計の針は23時57分を指していた。

「逝こつか」

「うん、逝こつ」

一口だけ食べたロウソクの刺さったケーキ。
靴を並べるからかわりにケーキに吸いかけのタバコを置き去りにした。

真冬の夜のビルの屋上は、身も凍るほどの冷たい風に曝された。

一步。

そしてまた一步。

次の一步で、私の心に光が差す。

アラタは最後の一步を踏み出す前に、私の腕を引き寄せ、抱き締めるとそのままビルの6階から落ちた。

その時だった。

「愛……！」

屋上の重いドアが開き、私の名前を呼ぶ朔哉の声が聞こえたような気がした。

落ちる瞬間はきつと一瞬の出来事。

けれど私の中では、まるでスローモーションにかけたみたいに回りが見えた。

名前を呼ぶ声の先には、朔哉がいたように見えたのは幻覚だったのか現実だったのかは、今となってはもうわからない。

ごめんね、朔哉。

ごめん

アラタの腕に包まれて、落ちていくその先には大きな光と青い薔薇の蕾だけが見えた。

“孤独”という闇の中から抜け出せる。

私は目を閉じ、光の中へと落ちていった。

目撃者

0時を回ると学校のチャイムのような音がビルに響き渡った。

「愛ー!!!」

ロウソクが8本刺さった食べかけのケーキだけが、ビルの屋上にポツンと残されていた。

朔哉がドアを開けた瞬間だった。

顔立ちが整った日本人離れしたスーツをきた男が、愛を庇うように抱きしめ、落ちていくのが見えた。

止めるなんて言葉がどこにあったらうと思うほどに、そんな時間など既になかった。

それでも愛の手を取らなければならないという無意識な行動から走り出していたが、ハツとした。

落ちた姿を確認することなんて、出来ない。

これから何をどうすればいいかなんて考える余裕すらなく、ただ呆然と立ち尽くしていた

ポケットから携帯電話が鳴り響くと、あまりの驚きに思わず体がビクンと跳ねた。

どれくらい時間が過ぎただろう。

携帯を手に、着信相手はエリカだ。

何度も愛の携帯に連絡したものの結局繋がらなく、心当たりある場所をエリカと共にそれぞれ探し回っていた。

おそらく見つかったのかという確認の電話をかけてきたのだ。

けれど朔哉は電話にできることはせず、鳴り続けるのを途切れるまで聴いていた。

電話の音を聞きながら、やらなきゃいけないことを思い出していた。

鳴り終えた携帯電話のボタンを徐に押した。

“ 119 ”

コールが1回鳴ると、すぐに若い男の声が聴こえてきた。

それからどんなふう話を切り出し、愛のことを説明したのかは記憶にない。

ただ、淡々と事件が起きたビル名とわかる限りの住所を説明したことでだけはなんとなく覚えていた。

静かな夜の街。

頭の中は真っ白で、思考が停止している。

遠くで聴こえる車のクラクションの音だけを聞いていた。

まもなく、救急車とパトカーのサイレンがビルの下で止まった。

ただのノイズでしか聴こえなかった、いつでも町を走る聞き慣れたサイレンが、今日は妙に違和感を覚える。

ドアの向こう側から騒がしい足音が聞こえてくると、勢いよく重いドアが開いた。

数人のスーツ姿の男たちが飛び込んで来るように入ってきた。

最初に口を開いたのは背が高く、体格がよく、強面の40代後半くらいの男だった。

「キミが連絡をくれたのかい？」

「はい」

「少し話を聞かせてもらえるかな？」

朔哉は

「はい」と返事をしながら頷いた。

強面の男は後ろに引き連れている若い刑事たちに顎で合図すると、ほぼ真ん中に立ち尽くす朔哉を数人の警察が端に移動するよう促した。

現場検証が始まると同時に、朔哉の元にさっきの強面の偉そうな刑事が2人の若い刑事を引き連れて近づいてきた。

強面のせいか威圧的な態度に見えるその刑事は、スーツの胸ポケットから1枚の名刺を出し、朔哉の前に差し出した。

「改めまして、私、捜査一課の金田です」

名刺を受けとると続いて、まるで狐のような細い目をした男は工藤と、如何にも優等生タイプと言える固そうな男は佐藤と名刺を出さずに名乗った。

朔哉は同じように頭を下げているだけだった。未だ現実に来た出来事を受け入れられずにいる朔哉だが、刑事は一瞬にして精神は正常であることを見極めたのか、金田は話を切り出した。

「キミの名前は？」

「吉川朔哉」

「年は？」

「18です」

それから住所や学校名など詳しく聞かれ、朔哉が答える度に工藤は警察手帳に書き込んでいる。

他の刑事は世話しなく動き回っている。

鑑識に出す指紋なども詳しく調べているようだった。

身元を一通り聞き終わると、次第に本題へと話は流れていった。

「彼女の身元はまだ不明なんだが、知り合いか？」

「はい 彼女でした」

3人の刑事は皆顔を合わせ、微かに頷いた。

愛の飛び降りか、自殺じゃなければ他殺になる。

第一発見者である朔哉に念のため目をつけているのだろう。

「そうか、彼女か。名前は？」

わざとらしく金田は声のトーンを下げていたが、同情すら感じなかった。

「下條 愛」

金田は工藤に目配せすると頷き、さっきまで何もなかった重いドアに黄色いテープが貼られているのを潜り、屋上から出ていった。

目撃者（続1）

「そこでだ、なぜキミはこんなところに来たんだ？彼女に呼ばれたのか？」

確信を得るかのように、けれど口調は穏やかだった。

金田はずつとこの質問をしたかったのだ。

朔哉には鋭い視線に、節々に“真実だけを語れ”と言わんばかりの口調から疑っていると、痛いほどに伝わっていた。

「いえ 今日、愛にオレが他の女とキスをしているところをみられて、そのまま気まずい雰囲気のまま別れました。だけど、謝りたくて何度も携帯に連絡したけどずっと繋がらなくて」

予想通り金田の顔つきが変わった。

「それで？」

「愛の親友のエリカと一緒に心当たりあるところを探し回りました」

「自宅に居たかもしれないのに探し回ったのか？それとも最初に自

宅に連絡したが、いなかった?」

朔哉は一度金田の目を見つめ首を左右に振り、コンクリートへと視線を落とすと白い雪が水玉模様を描き始めていた。

「愛は 家が嫌い、嫌なことがあった日は家には帰らないやつでした」

佐藤はボールペンを顎にあて、眉間にシワを寄せ考えられているようだ。金田もまた、2・3度頷いた。何も話さないうちから疑われた目で見られることは不愉快だった。

元々隠すことなど何一つなかったが、どっちにしろ疑われるのなら、見たものすべてを話し始めた。

「オレが浮気した相手はエリカでした。気の迷いつていうか 間がさしたんです。だけどあいつは 怒りませんでした。いつだってそうなんです。だから時々 あいつの心が分からなくなるときがあつて」

“朔哉の前ではちゃんと心から笑えてるんだよ”

今になって愛の言葉が甦えり、別れ際に見せた笑顔のあとに、初め

てみせた涙を流した横顔が目には浮かんだ。

何であんなことしたんだろう　　胸が熱くなった。

涙が滲むのをグツとこらえ、詰まらせた言葉を続けた。

「だけど　いつも何をしても笑う愛が、泣いたんです　オレす
ごい後悔して、どうしても謝りたくて探したんです」

「明日学校で謝れるのに？」

いくら仕事とはいえ、一人の人間がこの世の中から消えたというのに“疑”の心しか存在しない警察は、人の心をわからない生き物なのかもしれないと、感じた。「今日は　7日は愛の誕生日でした。オレの勝手ですが誕生日どうしても謝りたくて。だけど結局　どこ探しても見つかりませんでした。もう0時を回ろうとしてたし、諦めて家に帰ろうとフと空を見上げたんです。気のせいかもしれないけど、愛の声がした気がして　そしたらこのビルの屋上の端に人影が見えて思わず走り出していました」

金田は腕を組みゆっくりと歩き出し、端で足を止めると下を覗いた。想像しただけでも足がすくむ高さだ。

「それでキミはここへやってきた ってことか」

右手で顎を撫でながら、クルリと振り返りじつと朔哉を見つめた。

「落ちた彼女がその下條愛だということを知ってるということは、顔を見たのかい？会話は？」

「ドアを開けた瞬間 一瞬だけしかみえませんでした。間違いなく愛だと思います」

本当に一瞬だった愛と見知らぬ男が抱き合って落ちていく映像が、脳裏に焼き付いていた。それから金田は次から次へと質問を投げ掛けてきた。

永遠と続くようだった。

朔哉は一つ一つ、わかる限り正確に話したが、どうしても不可解なことがあった。

これほどまでに事細かく、いろいろなと聞きたがる刑事が愛のことしか聞いてこないのだ。

ビルから落ちたのは愛と、もう一人だ。

日本人離れした黒いスーツ姿の男。

どうして誰も男を調べようとしないのだろう。

既に身元がわかっているからか？

それでも他殺のことも視野にいれてるのなら、確実に話には出さずだ。

「恐らく、自殺の線が濃いとは思いますが、また話を聞かせてもらおうかもしれない。今日はゆっくり休むといい」

一通り事情聴取を終えると、最後までその男の話題は出なかった。

「あの」

白い息が目だった。

どうしても朔哉は確認しておきたかった。

金田は朔哉の言いたいことを悟ったように、似合わない笑みを浮かべた。

「人は明日生きてるとは限らない。命あるものに後悔することはするな」

「はい」

「下條愛だが、彼女は奇跡的にも生きている。意識不明の重体だがな」

朔哉の左肩を2度叩くと、背中を向けて立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162h/>

Blue Rose

2010年12月21日15時02分発行